

## 第2回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム 2012 in 熊本大学

【日時】平成24年5月16日(水) 14:00～17:30

【テーマ】①大学での学修の内容と時間を、教員・学生・経済界はどう考えているのか  
②大学での学びを深める上で、高校までの学習や入試は今のままでいいのか  
③学修時間を増加・確保し、大学での学びを深めるために何をすべきか

【形式】パネルディスカッション(進行:山中 至 熊本大学理事・副学長)

(谷口熊本大学長、熊本商工会議所会頭、県立熊本北高校長、熊本大学生3名)

【参加者】250名(学生:140名、大学関係者:70名、その他:40名)

### 【パネリストの主な発言】

- 学位授与方針を明確にして、学生にやる気を出させる教育が必要。特に教員が変わることが必要であり、授業・講義の工夫、達成度に関する指標を設定し、教育に取り組み教員が評価される仕組みを作ることが、大学教育に求められている。
- 国際社会で活躍するためには、課題の発見や問題解決の能力が必要であり、本学でも、教養教育の改革の取組、図書館のアクティブラーニング環境への転換等の取組を進めている。創造的知性・グローバルな視野、国際的対話力などが学位授与の条件になっており、これに見合った具体的な能力をつけて欲しい。
- 大学教育に対する期待として、①英語教育の徹底による内向き思考の脱却や、②高校が完全に受験だけの体制とならないような、大学入試の改革が必要。「知識」でなく「考える力」、討論・コミュニケーション力を徹底的に鍛えて欲しい。
- 教育界は変化を嫌う面があり、高校も変わってきているが悪弊が残っている。高校でも参加型・双方向の授業への転換や履修主義から習得主義への転換が必要。

### 【学生ハネリストの発表内容】

- 大学は人と人の繋がり成り立つもので、先生も学生も真剣に相手に相手に接することが必要。先生は研究内容の説明ではなく、学生に人としてこうあって欲しいという部分を明確にして欲しい。
- 医学生へのアンケートの結果、学生が感じる医学部教育の問題点は、大学側の問題として、①大学として目指すもの(学問が国家試験合格が)が明確でない点、②臨床科目の講義日程や試験日程がマッピング・系統立てられていない点、③学生側の意識として生物に関心がない、④偏差値が高いが医学への意欲の低い学生が入学してくる、⑤自主的にグループで学修・議論するための場がない点等がある。例えば臨床科目への集中講義の導入、モデルコアカリキュラムの準拠、学生がやる気のもてる学修スペースを作る点等が必要ではないか。
- 学修時間が減少しているのは、学生に学修への興味を薄くしているからであり、高校で生徒の興味関心でなく偏差値の高低により進路指導をすることが問題。また、入ってからやりたいことを探せる大学があってもよく、1年次は基礎教育に特化する、学部内転科制度の一層の活用等が必要。

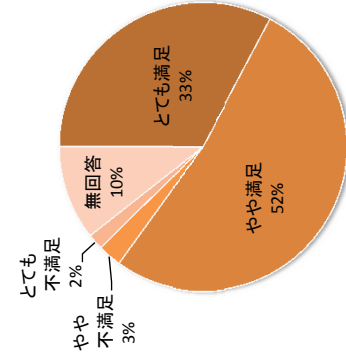
### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

- 最近の医学生はできる学生とできない学生の学修能力に幅がある印象。リサーチマインドを育てる教育しており、近年は卒業判定を厳しくし、国家試験の合格レベルに達して卒業させるよう努力。学修環境の改善が必要。30以上の試験があるのは改善が必要。学生進行中にカリキュラムを柔軟に変えることについて制約がないか懸念。
- アクティブラーニングの場として学生がどういう場を必要としているのか意見を聞かせて欲しい。但し授業が変わらなければ学生の学修スタイルも変わらないのではないか。
- 「大学のここがダメ」というネガティブな所から入っているのが残念。またグローバル化は多様性が求められるのに、「大学はこうあるべき」という単一性を求める点が残念。リーダー育成に関する言及があってもよかった。
- 自分の将来の希望について分かっていない高校生が増えている。高校で適切な進路指導をお願いしたい。

## 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

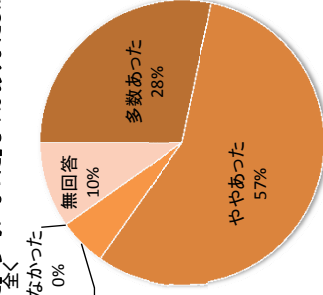
※回収率=45%(113人/250人)

### 本日参加された満足度をお聞かせください。



満足度:85%

### フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためになった」「参考になった」ものはありましたか？



参考となるコメント:85%

### 第3回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム 2012 in 早稲田大学  
 【日時】平成24年5月28日(月)14:45～17:30  
 【テーマ】「予測困難な世界を生き抜く人材の育成に、大学はどう取り組むべきか」  
 【形式】パネルディスカッション(進行・モデレーター:田中愛治 早稲田大学理事)  
 (白井克彦 早稲田大学学事顧問、吉田文 早稲田大学教育・総合科学学術院教授、橋本周司 早稲田大学常任理事、文部科学省)  
 【参加者】314名

#### 【パナリストの主な発表】

- 大学教育において「何を学ぶべきか。」という点については、古典的ではあるが、基礎知識、情報分析、問題解決法、社会的能力の4つであり、これにつきる。
- 日本では多くの科目を履修しなければならぬが、トータルでの米国の履修科目数は日本の半分程度である。科目数が多ければカリキュラムマップをつくるのが困難となる。このように考えると、学生の主体的な学修は必要だが、それを実現可能にするための様々な装置を大学は考えないといけない。
- 今は予測困難な時代であるが、次の世界に必要なことを先取りすることが大学の使命である。こんな時代を生き抜く人材はどのような者かという点、知識や技能などに対する感度を高めた腹の据わった人材である。そのような人材が育ってほしい。

#### 【会場学生からの主な発表】

- 自分が大学でどんなことを勉強したいかわかっていない段階で自分の専門分野を決めて入学してしまうことは私にとっては大きな不安材料だった。入学後に学んだことを踏まえた、興味・関心の変化に合わせて、専門分野を選び直したり、複数分野にまたがって学ぶこと、学生が自主的に学び深めていく機会があれば、私が感じたような不安は軽減されると思う。
- 就職活動を通して感じることは大学で身に付けた専門性が求められないということ。実際に就職面接でも卒論の内容についてほとんど聞かれたことはない。これから、企業が大学教育に対して専門性を求めれば、学修していることが社会で活かすという意識が芽生え、学生が学修する動機付けになるのではないかと。
- 今回のフォーラムで発言する前、同年代の社会人に大学での学問が社会で活かしているのか聞いてみたところ、その答えは、ほとんどが大学での学問は求められないというものだった。私なりに考え、結論に至ったことは、どこの学部でも共通して社会で活かせることは、論理的思考能力や文章能力、プレゼンテーション能力などではないかということ。
- 大学でのテストやレポートの採点基準がわからないことが多い。学生もそれなりに考えて提出したはずで、レポート提出やテストを受けた際には添削をいたされた。やる気にも影響する。
- 高校3年生の家庭教師があつて生徒から相談を受けているが、社会を見る観点などが大学入学前に教えたことがあつても、要求されたこと以上に教えない方がいいのか、家庭教師の役割として受験科目を教えることを優先すべきなのかというジレンマがある。例えば、公務員試験なら筆記試験に加え、面接もあるはずで、大学側でも高校生の段階から社会に必要な人材を育成するなどと検討しているなら教えてほしい。

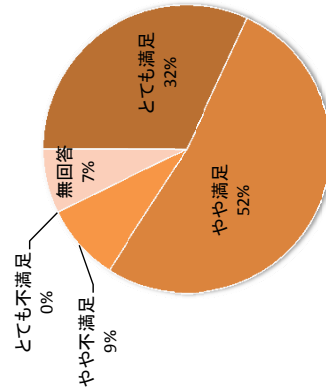
#### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

- 学生の勉強時間に関して大学図書館の役割が欠かせないはずで、日本の大学図書館は米国で24時間開館している大学図書館と違い、日本の大学図書館は開館時間が短いほか、税金が投入されているはずの国立大学図書館は一般市民の利用が認められていないなど、地域に開かれたいない。せつかくの知の宝庫が役に立っていないのではないかと。今後の日本の国力にも関係する問題。
- 大学には研究と教育という二つの役割があるが、教員の人事や評価は研究業績でされており、教育重視の大学をつくるのなら、旧来の研究重視の教員をどこに追いやるのか。日本全体の学術研究の国際競争力の低下をどのように防ぐのか。教育と研究をどちらも強化するのであれば予算・人材を削減するための改革ではなく、大学から日本を変えするための予算をつぎ込む改革にしたい。
- 学生のモチベーションが低いと感じることがあるが、一つの理由は、手段として大学を使う意識がなく、大学に入ることが目的となってしまうためではないか。もう一つの理由は何のために勉強しているのかという問いに対する答が見いだせないこと。よくある答として勉強することによって社会に役立つ、論理的思考力が身につくなどと言われるが、それらが必ずしも説得力ある答と思えない。

### 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

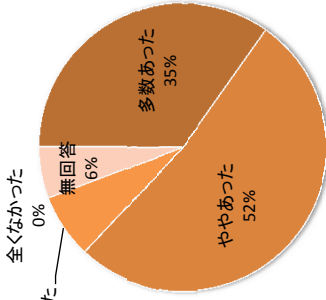
※回収率=22%(69人/314人)

本日参加された満足度をお聞かせください。



満足度:84%

フォーラム参加者の発言・コメントの中になつた「参考になつた」ものはありましたか?



参考となるコメント:87%

## 第4回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】筑波大学教育改革フォーラム

【日時】平成24年6月16日(土)13:30～16:50

【テーマ】学生の主体的な学びを確立するために ～より高度な教育・研究を実現する大学へ～

【形式】パネルディスカッション等

- ①基調スピーチ「大学教育改革の展望」(金子元久 筑波大学 大学研究センター教授)
- ②本学における教育の質向上のための取組成果発表(新井一郎 筑波大学数理物理系系準教授)
- ③パネルディスカッション

(コーディネーター) 阿江 通良 筑波大学副学長

(パネリスト) ・坂東久美子 文部科学省高等教育局長

・金子 元久 筑波大学 大学研究センター教授

・篠田信比古 キヤノン(株)顧問

・筑波大学学生2名

【参加者】230名(本学学生100名、本学教職員90名、学外40名)

【パネリストの主な発表】

○ 学生の専門性に対する企業の評価に関する指摘があるが、それは企業が変わるため、企業では5年以上同じ仕事をすることはない。変わっていかないと企業が生きていけないためである。

○ グローバル化と言われるが、グローバル化という一つのスタンダードがあるのではない。グローバル化で重要なのは、これから日本がどのように世界に貢献していくかを考えること。

○ 自主的な学びのためには、①興味を持つような授業が少ない。②授業で学ぶ意味が感じられない課題が出ることで学ぶ意欲が低下する。③3年生には就職活動があり、自主的な学習時間が減る、などの課題があると考えられる。このような課題を踏まえ、学生は様々なことに興味を持ち自主的に学んでいくべきであり、教職員は教育者であることの自覚を持つべきである。また、学生は潜在的に学びたい願望を持っており、教職員はその願望を無下にしてはいけない、と考える。

○ 私が感じた日本の大学の課題点は4つほどある。①韓国の大学での成績は絶対評価であり、悪いと就職などで不利になり、また、成績が悪いと大学から警告を受け退学となることもあるため必死で学修する。一方、日本の大学の成績は絶対評価で就職において重視されない。②韓国の図書館は24時間開館しているが、筑波大学図書館の開館時間は午前9時から午後10時まで(土日は午後6時まで)であり、いつでも学修できる時間を整えてほしい。③課題が多すぎると自分で勉強する時間がなくなるため、適当な量が望ましい。④授業時間の多くを教員が一方的に話し続けることが多く、学生が参加できる時間が少ない。

○ 大学は社会に出る前の準備をする場で、遊びの場所ではない。また、間接的な社会活動もでき、アルバイトで小さな社会を体験することもでき、例えば、筑波大学の授業では社会人の話を聞き、討論して自分の未来について考え、計画できる授業がある。このような授業を増やしてほしい。

【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

○ 主体的に学ぶ上でモデルを示すことが非常に重要で、二つのモデルがあると考えている。一つは文部科学省の説明する学位授与方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針などの制度的理念である。もう一つは実際の人間としてのモデルであり、主体的に学ぶことによって実現できるモデル(人物像)を示してもらえらると学生も主体的に学びやすくなる。

○ 既存の大学のリソース・財産をシェアしてはどうか。能動的に学びたいと考えた時に研究室間の壁によって研究機器・設備が使用できないことがある。研究室の所有するものだからと考えるのではなく、大学全体の財産として、研究室間で協力して活用することができないか。

○ 大学の教員は30年間で5万人から6万2千人に増えている一方、35歳以下の教員が1万人から6,700人に減っているというデータもあるが、学内の教員が教員を評価すると若手が評価されにくく、組織のヒエラルキーに問題があると考えられる。これは組織構造が要因と考えられることから、組織の見直しや公正に判断できる第三者の評価機関が必要。

○ 学生パネリストの一人は学修意欲の高まる授業がないと主張していたが、そのような授業がないのなら自ら企画提案してはどうか。私は自ら大学院の授業を企画提案して、担当教員了解の下、授業を開設してもらったことがあり、興味・関心のある授業を自ら立ち上げることが可能。

○ 授業外学修の時間を確保することを全ての授業について文部科学省は求めるのか。またはトータルで週に何時間といった形で、授業によって多様であっていいののか。全国で行われている主体的な学びを見ると、授業によってかなりの授業外学修を必要とするものがあり、全ての授業を一律に授業外学修時間を確保すると学生にもかなりの負担がかかる。既にかんがりの授業外学修をさせている場合には、それを減らせと言うのか。加えて、特に教員養成系について免許取得のために必要な科目数が多く、各学生が受けるべき科目が増える要因になっているのではないか。

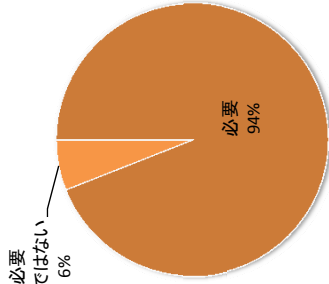
○ 学生の主体的な学びを引き出すには魅力的な授業を教員が行うことが基本であるが、様々な分野で専門化・細分化が進み、非常に視野の狭いような特定分野でしか通用しない授業を行っている場合がある。教員は学問分野全体を把握し、本質を理解した授業を教授が行い、どのような意味があるか学生に理解させられるような授業を展開できる教育力を教員が身につけることが重要。

○ カリキュラムが非常に散漫な設計になっており、学びそのものが体系的で広く浅くになっており、自分で物事を深く考える動機づけを与えるカリキュラムになっていない。専門教育であっても学士課程であるから、汎用性・普遍性のあるような授業内容を進めるべきで、専門教育を通して学生が世界に出たときに、大学で学んだ意味が理解できるようなカリキュラムの体系的性が必要。

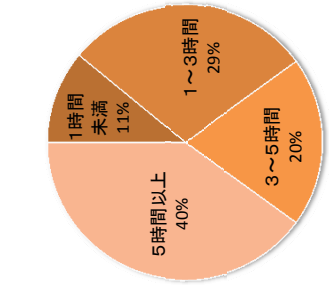
## 第5回大学教育改革地域フォーラムの結果

### 【学生を対象とした主なクリッカー※アンケート結果】

学生にとって、大学の授業以外に学ぶ時間を確保することは必要と思いますか？



今週1週間を平均して、大学の授業以外に1日何時間勉強しましたか？

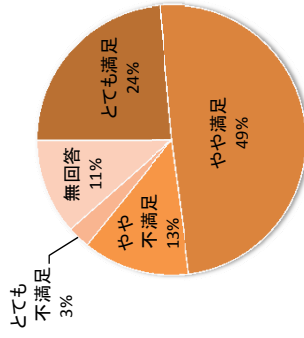


※クリッカー：大教室等でアンケートへの学生の回答を即時に集計・表示できる無線端末(98人)

### 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

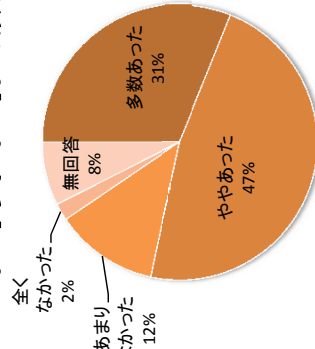
※※回収率＝約62%(148人/230人)

本日参加された満足度をお聞かせください。



満足度：7.3%

本日のフォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためになった」「参考になった」ものはありましたか？



参考となるコメント：78%

【名 称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 宮城教育大学

【日 時】平成24年6月29日(金)13:30～17:00

【テーマ】○大学の学修の内容と時間を、教員・学生・メディア等はどう考えているのか？  
○学修時間を増加・確保し、大学での学びを深めるために何をすべきか？

【形式】パネリストカスジョン(コーディネーター) 菅野 仁氏 宮城教育大学教授

(パネリスト)常盤 豊 文部科学省大臣官房審議官(高等教育局担当)

見上一一幸氏 宮城教育大学長、鳥森哲男 宮城教育大学教授

中川西剛氏 宮城県高等学校協会会長・仙台第三高等学校校長

鈴木素雄氏 河北新報社論説委員長、宮城教育大学・大学院学生3名

【参加者】280名(学生：171名、大学関係者(教職員)：83名、その他：26名)

【パネリストの主な発言】

○ 学生が何をすべきか見えないようだが、教員も示せていないし、指導体制についてもデプロマポリシーはあるが、学内で統一されているか疑わしいし、成績も甘い。大学や教員の組織的体制ができていないか、一度、しっかりと考える必要がある。自主性はどうか育つか考えたとき、学生も教員も目的意識をはっきりさせて動いていかないといけない。

○ 大学に入ってから主體的に学べるとしても無理で、初等中等教育段階から始めないとできない。

○ 審議まともには質を伴った勉強時間の確保が提言されているが、勉強時間は質・量ともに問われている。質を伴うということは知識や論理を活用できるように発信することと理解している。分かったつもりでは発信はできない。知識を蓄えるインプットと発信するアウトプットを組み入れることが重要で、私の場合はインプットに偏っていた。

○ 1年間の学修を充実するためには、教員、先輩などの縦のつながりを大切に、1年生で4年間の見直しを持った姿勢で臨むことが大事。

【会場参加者からの主な意見(質疑応答)(1)】

○ 知識の獲得に限定しない、現場での経験・体験なども違った意味で勉強に含まれるのではないか。

○ 米国の大学で学ぶ機会があったが、その時の印象では、授業は少人数で学生のプレゼンが多かった。そこでは自分で授業をつくるという意識を持って臨むため、知識の量と深さが違う。宮城教育大学でも少人数の授業があればよい。

○ 学修時間が不足しているから確保するというのではなく、現在あるものを変容させるということにもあるのではないか。例えば、歴史を学ぶことは受動だが、学ぶことを通じて体験的に学ぶことに発展させることは可能であり、それを継続して行うことで能動的な学修は維持される。

○ 小学校から高等教育までのカリキュラムの改革が必須なのではないか。教育において量が重視されていると感じる。大学だけで能動的な取り組みを行うだけでなく小学校から段階的に取り入れていくのであれば、学年階層を重ねることで学修の量を克服できるのではないか。

## 第6回大学教育改革地域フォーラムの結果

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)(2)】

- 大学を変革しようという教職員と学生との間に温度差がある。年齢的な壁や、価値観や考え方が違うので、教職員は学生のことをあまり理解していないのではないか。
- 大学だけ切り離して考えられない。大学入試の仕組みを変えないといけない。社会の相対的なシステムから現在のようになっている。大学に来る学生が多くなる中で大学の位置づけを考え直す必要があるのではないか。
- 体験することは大事ではあるが、そういうことを表に出すことが大事。また、一定の知識、素養も大事で結局はバランスだと思ふ。うまくバランスをとっていくことが重要であり、1、2年で詰め込み過ぎなどと単純に考えないほうがよい。
- 我々がこれまで身に付けてきたものは知識であり、経験であってそれらはスパイラルに関連し合っている。1、2年は、知識を、ということだけでなく、1年から知識獲得と併せ、実習または体験も行うことが必要。
- 特にやりたいことがなく、進んで数学が好きだからとかなんとなく決め、なんとなく進んでいる。このままじゃだめだと感じることも多く、それが今の世代となっている。それだったら、教える側が学生たちにもっとやる気が出るよう、自主性ができるように強制をし、強制的に先に自主があり、課題を多く課し、中学、高校の延長でやっていく方向にするしかない。
- 我々が行う実習を例に挙げると、理論だけではだめであり、実践とリンクさせる必要がある、体験学習と教科教育がうまくリンクすると学修する意欲や興味も湧いてくるのではないかと。

117

【名称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 愛知県立大学

【日時】平成24年7月4日(水)13:30~17:15

【テーマ】授業時間内外における学生の主体的な学びをどのように保証するか

【形式】パネルディスカッション

(モデレーター)

(パネリスト)

- 佐々木 雄太氏(名古屋経済大学学長)
- 常盤 豊(文部科学省大臣官房審議官)
- 宮崎 直樹氏(トヨタ自動車株式会社常務役員)
- 喜多村 康二氏(名古屋外国語大学教務部長・教授)
- 高島 忠義氏(愛知県立大学学長)
- 宮浦 国江氏(愛知県立大学学生支援センター長・教授)
- エドガー・ライト・ポープ氏(愛知県立大学教授)
- 伊藤 亜衣氏(愛知県立大学学生)

【参加者】167名(学生:55名、大学関係者(教職員):85名、その他:27名)

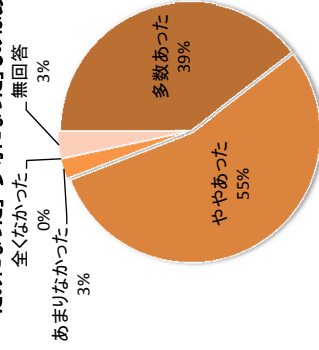
### 【パネリストの主な発言】

- 真の学びは自発的な動機から生まれる。学生自らが学びたいと思えるような動機付け、きっかけをつかめる環境を作り出すことが大事。
- 学生の学修時間の不足の原因の一つは学修しなくても単位を取れるから。何の目標もなく卒業が目的となっていれば学修するわけがない。学修時間を増やしたいのであれば予習、復習しないという理屈でできない授業を教員が実施すればよい。
- 大学全体で大学の目標を共有しないことには何も始まらない。大学は何のために存在しているか。大学が輩出する学生とは何なのか、大学の理念や目標を学生に提示し、共有することで、同じ目標に向かうことができる。
- 「審議まとめ」は大学への一方的な宿題のように見えてならない。大学は一方的に出される宿題や義務化されたFD、言われながら行う外圧的なものではなく、大学を変えたいという思いから自ら行うものである。
- 平成20年度中教審答申は「グローバル化する知識基盤社会において学士レベルの資質能力を備える人材養成は重要な課題」とし、学士力に関する「内容」について改善方策が例示されていた。今回答申は質・量を前提に「学修時間の確保」に力点。これは学修「内容」から「方法」へと力点がスライドしたとも受け取れ、両者間に温度差があるようだが、両者の関係はどうなっているのか、大学はこれをどう受け止めるべきか。

### 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

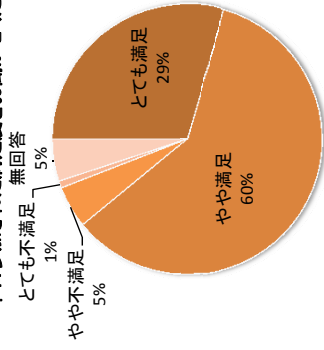
※※回収率=約43%(119人/280人)

フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためにになった」「参考になった」ものはありましたか？



参考となるコメント:94%

本日参加された満足度をお聞かせください。



満足度:89%

## 第7回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 大妻女子大学

【日時】平成24年7月7日(土)13:30～16:30

【テーマ】「学生の主体的な学びを確立するため、どうすれば学修時間を確保できるか」

【形式】パネルディスカッション

(パネリスト) 常盤 豊(文部科学省 大臣官房審議官(高等教育局担当))

萩上 紘一氏(大妻女子大学 学長)

日比谷 潤子氏(国際基督教大学 学長)

川延 宗之氏(大妻女子大学 人間関係学部 教授)

五十嵐 浩司氏(大妻女子大学 文学部 教授)

杉谷 祐美子氏(青山学院大学 教育人間科学部 准教授)

(モデレーター) 川嶋 太津夫氏(神戸大学 大学教育推進機構 教授)

【参加者】151名(本学学生:32名、本学教職員:52名、その他:67名)

### 【パネリストの主な発言】

○ 履修科目数を一定程度に抑えれば、個々の科目の準備に時間をかけられ、グループ活動を含めた授業も可能となる。昨今、多様性が叫ばれているが、一つのグループの中に、海外経験を持つ学生や異なる学年の学生の学生が含まれるなどにより、学生同士が教え合うというメリットがある。

○ 生活体験や経験を大学での学びとどう結びつけるか考えないと学びが有効に機能しない。

○ 主体的な学びのために必要なことは、多様性、社会とのかかわり、本来の意味でのキャリアを考える動機付けである。

○ 学生は自らが興味のある内容で、負荷の少ない授業、自由に幅広く選択履修できることを望む傾向がある一方で、主体的な学修活動を取り入れた授業は、「ためにならない」という実感を持っている。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)(1)】

○ 大学での履修指導は行き届いており、学生は甘えずぎではないか。大学側が最初からレールを引いてしまうと学生の学びに対する主体性がなくなってしまう。指導の行き過ぎはある意味、過保護という側面があるのではないか。

○ 就職に就こうとする場合、相当量の科目をこなし、場合によっては、200単位が必要となる。学生を主体的に学修させる一方で、しっかりと指導しないといけない部分がある。単に主体性だけでなく様々な問題が関わっている。

○ 一週間に複数授業の課題が重なる。課題内容によっては考え抜いて、調べ物が必要な場合もあり苦勞している。また、専門科目では演習が多くなり、事前準備が必要となる。指導案を書いたり、準備に時間を要する授業が多いという印象である。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

○ 今のコマ数や単位数を前提として学修時間を求めるとパタンクするのではないか。

○ 学生のボランティア活動について、単位認定などで積極的な応援をしてほしい。学生はメリットがないと動かない。学生のメリットとしての単位認定であっても、ボランティア活動のきっかけにはなる。(一方、ボランティアという性質上、そういうものではないという意見あり。)

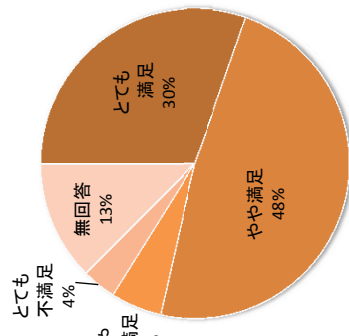
○ 職員として就学指導にかかわっているが、昨年度、米国で見たのは、少数の科目を集中的に学ぶことであり、そのシステムが確立している。日本でも同様に少数科目を集中して学ぶことにより、教員、学生の負担が少なくなるのではないか。

○ 4年間をどのように過ごすかは個人の考えであって、本当に充実した4年間なのかどうかは、学生の責任。大学が面白くなければ大学を替わるぐらいのつもりで勉強すればそれが社会で役立つ。

## 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

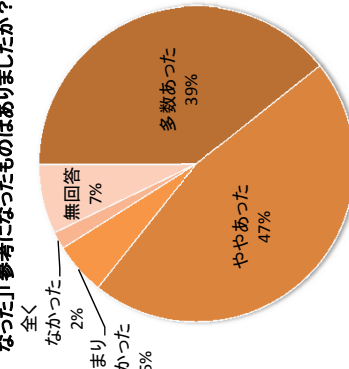
※※回収率=約34%(56人/167人)

### 本日参加された満足度をお聞かせください



満足度:78%

### フォーラム参加者の発言・コメントの中のために「なった」「参考になったものはありましたか?」



参考となるコメント:86%

## 第8回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム@千葉商科大学

【日時】平成24年7月11日(水)13:10~16:00

【テーマ】なぜ学ぶ 何を学ぶ どう学ぶ ~ Why, What & How do you study? ~

【形式】パネルディスカッション  
(パネリスト)

城井 崇(文部科学大臣政務官)

板東久美子(文部科学省高等教育局長)

島田晴雄氏(千葉商科大学学長)

大竹美喜氏(アフラック(アメリカ)アフラ-生命保険会社)創業者・最高顧問、学校法人千葉学園理事)

Rosie Edmond 氏(Education USA Regional Officer)

(モデレーター) 宮崎緑氏(千葉商科大学政策情報学部長、中央教育審議会委員)

【参加者】918名(学生:835名、大学関係者(教職員):67名、その他:16名)

### 【パネリストの主な発言】

- 企業には人材を育てる余裕がなくなってきた。できれば即戦力になってほしい。スキルだけではなく、人間力そのものが重要になる。人間力として、知力、気力、体力、コミュニケーション能力などを備え、勇気と大胆さを企業としては求めている。
- 本当に興味を持って時間を使えば時間はある。自分の本当の興味に気づくための手がかりをくれるのが教員であり大学である。目的意識や興味を持たせることができる教員がある。必要である。

○ 日本ではどのような動機付けをするかという点が議論になるが、米国では皆、成功したいという意欲があるので、他者からの動機付けが必要ない。個人主義であり、競争が激しいが、これは米国においては、自分が成功することが目標であるという移民の歴史とも関係がある。教員であっても学生であっても、何を学ぶべきであるか、それは自分から探すものである。

○ 学修時間が短いとされるが、このままでは文部科学省が学修時間を満たしているかを一定の基準として設けるのではないかと、学修時間という一つの指標によって補助金を出すようなことはないかと懸念する。学修時間は確かに重要な指標の一つであるが、人間というのは本来、多様で、多面的であり、個人の力を引き出すことが教育ではないのか。人間は学修時間など、単一の尺度のみで測りきれないものではない。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

○ 私は大学入学前まで勉強嫌いであったが、大学入学後、学修時間が増加した。それはプログラムミングに興味を持ち、知識がなくて困ったところ、高校の数学を一旦から勉強し直しているためである。このように何か目的を見つけると学修時間は自然と増えると思う。学修時間を増やす前に、何で学ぶかというのを中学校、高等学校で考える時間があれば今の自分も違ったと思う。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)(2)】

○ アルバイトで学費等を稼ぎながら生活している学生が周りにいる。また、大学主催の就職講座に参加すると、社会勉強のためにアルバイトを薦められる。これらを学修時間の確保という点からどう考えるのか。

○ 主体的な学びは自分で選択することだと考えるが、学生が何を選擇すべきか大学側から提供してほしい。

○ 私は文系の学生であり、他の学生と比べ、学んだ内容を社会でどうやって役立てていくか疑問が多い。少人数でのグループディスカッションなどで得られる経験などは今後、役立つと考えており、そのような学生が自主的に行動できるような授業が増やすべき。少人数の授業を多く経験できれば主体的な学修の確立ができると思う。

○ 私の授業では学生から単位を掴みに行くような意識を持つ学生もいる。教室という壁を取り払い、例えば、今回のようなフォーラムを学生に運営させることできるはずで、主体的な学びのための工夫は、さらに考える余地はある。

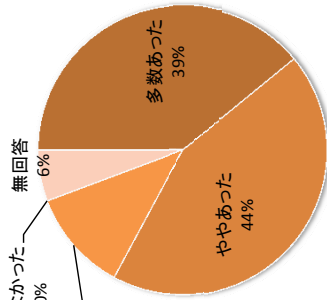
○ 問題提起映像にもあるように、大学の授業は講義形式で、レポートを提出しても、添削されたものは戻ってこない。学生がアウトプットし、それを共有することが少ないという実態がある。一方、アルバイトはアウトプットを実感できる。必要なことは、学びについては、考える機会を増やしたり、学びを学生のライフワークに結びつけることである。

○ GPAは就職に際してほとんど影響がないと考える大学教職員もいるが、このままで良いのか。

### 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果 ※ ※ ※】

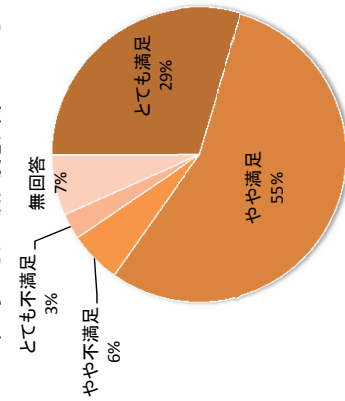
※ ※ ※回収率 二約70%(105人/151人)

フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためになった」「参考になった」ものはありましたか



満足度:84%

本日参加された満足度をお聞かせください



参考となるコメント:83%

## 第9回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 明治大学

【日時】平成24年7月13日(金) 13:30~16:45

【テーマ】なぜ日本の学生の学修時間は短いのか

【挨拶等】主催者挨拶 福宮賢一氏 (明治大学学長)  
 共催者挨拶 平野博文 (文部科学大臣)  
 問題提起 納谷廣美氏 (明治大学学事顧問)

【形式】パネルディスカッション

(モデレーター)

(パネリスト)

勝悦子氏 (明治大学副学長(国際交流担当))  
 常盤豊 (文部科学省大臣官房審議官(高等教育局長担当))  
 アームストロング=ホフメア、J氏 (明治大学政治経済学部特任講師)  
 船玉透氏 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授)  
 竹本田持氏 (明治大学副学長(教務担当))  
 若島司氏 (コニカミノルタホールディングス株式会社執行役人事部長)

(学生パネリスト)  
 明治大学学生4名

【参加者】197名(学生:32名、大学関係者(教職員):124名、その他:41名)

※当日は、Ustreamによる配信を行い、ユニークユーザー数は3,000名を超えた。

【パネリスト等の主な発言】

○ グローバル人材の養成にできるだけ絞り、学修時間の増加・確保に向け教育をどう変えたらよいかを含めた議論に期待。

○ 学生が主体的に学べるよう興味深い教育環境を創り出す努力をしなければならぬ。討論できるスキルを身に付けるための練習が必要。

○ そもそも日本の教員は、研究者としてはグローバルに活動していても、海外の大学という教育が行われているか、教育の現場をつさぎに見て経験していない。そのような機会が必要。

○ 企業が求める人材像は、①相互に理解しようとするコミュニケーション能力、ピンチに立ち向かう強い精神力、③何事にもチャレンジする姿勢、④スピード感を持って物事に取り組む姿勢、を持ち、世界を舞台に希望や好奇心に満ち、柔軟な姿勢自ら時代を切り開くことのできる人材。

○ 世界に通用し、世界に立ち向かうには競争が必要。授業について先生すら競争する海外へ出て行く学生自体が競争しないであろうのかと感じる。例えば、成績優秀者への奨学金等のインセンティブを付与するなど、競争心を煽ることも大事。

○ 意識の高い学生が活動していることが広まることによって、周りの学生に危機感が芽生え、学生全体が問題意識を持つようになり、勉強していくようになるのではないかと。

○ 日本人には、留学する際に英語力、留学資金、就職のハードルがある。特に就職活動はディスプレイバンテージが大きい。留学を増やすには、安心して留学できるような、就職活動の時期をもっと遅らせる必要。

○ 知識を詰め込む学修から、経験・体験を通じた見識を育てる学修への転換が必要。

○ 大学教育とは自らの意思で学び何を自らの目標として修学するかということ。もっと学ぶ意欲を持つて大学に入ってもらいたい。そういう意欲が今の学生にあるのか。大学で教育をする立場からは、学生の多様な能力をいかに引き出す機会を作っていくのか、こういうことが双方に求められている課題。

【配布資料「学生からの意見」の一部抜粋】

○ 大学での学びを充実させるには、高校までの基礎学力が必要となる。基礎ができていないと、大学での授業についていくことも大変。課題やレポートをこなすにも大変な力がかかり、やる気を持続させることが難しい。  
 高校から大学にかけての学びをいかに質的に転換するかが鍵となるのでは。

○ 学修時間を増加させるためには、経済的支援の充実など具体策を考えなければならぬと思う。また、質が伴わないと本来転倒。単に時間をかければ身に付くわけではないと思う。

○ 「やる気のない学生たち」の中から、ひとまず「やる気のある学生たち」を区別して育てるべき。大学が「やる気のある学生たち」に「成果を挙げさせる」努力をもっとたくさんすべき。そうすれば、「成果を挙げた学生たち」の影響で、大学全体の雰囲気や「やる気のあるもの」に変えることができるのでは？

○ 大人数が大きな教室でただ座って先生の話を聞いている、教員からの一方的な知識伝達になりがちな座学形式の授業において、ネットで実習(自習)できる教材を併用すべき。

○ 各々がネット上の動画を通じて講義を聴いたり、教室では分からないことを教員やSAなどに質問しながら実習に取り組むなどの形式は、授業科目によっては効果的だと思う。

○ 熱意のある教員を集める。学生が勉強の必要性を理解し、質の高い勉強をする努力をする。一方的な説明に終始する授業ではなく、学生が主体的に学べる方法を工夫する。

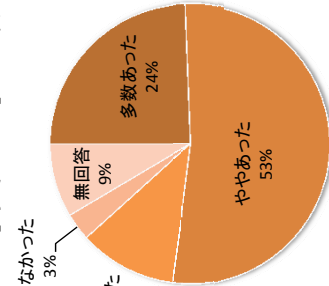
○ 大学で学んだことを、地域(小学生)に伝える。地域(小学生)に教える機会を通じて、大学生として学びの大切さや喜びを知ることができる。大学と地域が学び合い、育て合う。学べることが楽しいと思える関係をつくる。

### 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果】※※

※※回収率=約55%(504人/918人)

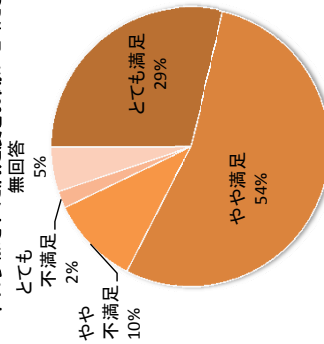
フォーラム参加者の発言・コメントの中に

「ためになった」「参考になった」ものはありましたか



参考となるコメント:78%

本日参加された満足度をお聞かせください



満足度:83%



## 第10回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 広島

【日時】平成24年7月14日(土)13:00～15:40

【テーマ】学生の主体的な学びを確立するため、どうすれば学修時間を確保できるか

【形式】パネルディスカッション

(モデレーター) 濱名 篤氏 (関西国際大学 理事長・学長)

(パネリスト) 板東 久美子 (文部科学省 高等教育局長)

木本 浩一氏 (広島女学院大学 国際教養学部 教授)

福田 智氏 (中国経済連合会 特別顧問)

広島県私立大学協会加盟大学学生7名

【参加者】322名(学生:76名、大学関係者(教職員):223名、その他:23名)

### 【パネリストの主な意見】

○ 高等学校での偏差値に偏った進学指導により、本人が望まない学部に入ることがあり、このことが学修時間に影響する。自分の目的に合う学部に入できれば当たり前のように学修時間が確保される。学修時間を増やすための動機づけが必要。

○ 学修時間の確保については、通学時間を予習・復習に活用するほか、授業のない空き時間を利用し、グループ活動をしたり、課題が終わらない場合に放課後を活用してはどうか。大学にいる間が勝負であると考えており、大学は学修環境やカリキュラムを整備してほしい。例えば、図書館の開放、空き教室の利用、移動教室をなくした休憩時間の確保などが考えられる。

○ 大学入試制度に問題があり、不本意で大学へ入ってくる学生もいる。また、ある程度出席し、ある程度の成績によって卒業できることも問題である。

○ 一般的には音楽大学学生の学修時間は問題提起映像で指摘される大学生の学修時間よりも長いと思われる。その理由は、音楽大学学生には週一回個人指導があり、そのための予習、復習が必要であり、それがない個人指導が成り立たないこと、また、この人の下で学びたいという教員がいて、学びのモチベーションとなっていること、音楽大学学生は、はっきりとした目的を持っていること、などが考えられる。

○ 学生に対して、単に学修時間の確保を求めたり、学修する動機付けを大学が働きかけるのではなく、学が高等学校化してしまっただけである。

学修習慣のある学生が大学教育改革に協力することは大変意義のある前進。どんなことを学修したいのか、どんな制度が必要なのか、意見が反映されることで日本の大学生と日本社会、国際社会間で強いつながりができる。

多くの留学生を大学に受け入れることで、国内にいながら留学した時と同じ環境にできるため学生の学修意欲増進にもつながる。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

○ 大学教育改革のためには、大学だけでなく小学校、中学校、高等学校での取り組みが必要。

○ 長期休暇中に海外留学制度を活用して感じたことは、日本では大学に入り直しても社会へ戻れない。学び直しのため大学に入っても社会に戻れるようにしてほしい。

### 【会場参加者からの主な意見(質疑応答)】

○ ヨーロッパでは30歳で大学を卒業して、そこから働く。それまでインターンシップ、海外旅行、仕事をしながら得る者もいる。いろいろな経験を積んでからそれを社会に活かすということを考えている。知識を得るために大学に長っている者もいる。子供を抱えて授業を受ける者もいる。これからの大学はそのような多様性も必要ではないか。

○ ほとんどの学生は何の目的もなく大学に入ってくる。そのため、授業を厳しくしても楽な授業に流れ、バランスが崩れる。ただ単に出席・単位認定を厳しくしても、何をするかモチベーションがないとただの苦痛でしかなく、単位を落とす学生が続出し結果的に留年になる。学費は親の負担や賞与制の奨学金であり、学費が払えなくなると中退することになる。大学を中退したり、就職できないで卒業した者は、就職の途が閉ざされて、その後の人生も閉ざされてしまう。そこに現在の問題がある。

○ 学ぶことの楽しさを実感している。大学の意義が軽んじられている。大学は教育とともに研究する機関。研究機関が軽んじられるのは国として一大事。技術大国といわれ、理系はもちろん技術を引き張っていくのは、理論だったり思想だったりするので文系も大切。

○ 単位制度実質化という名目で、1学期15回の授業を確保するという政策が実施されているが、むしろ何をどこまで学んだかを評価することの方が重要ではないか。そのことによって学修時間の確保や実質的な学びの確保が可能になると考える。

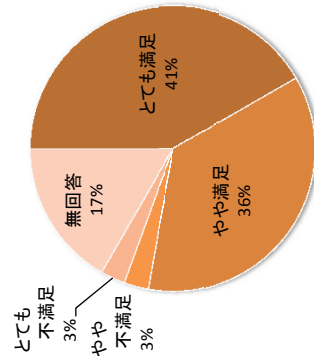
○ 授業を真剣に受けている学生が少なく、居眠りや携帯をいじっている学生がいる。また、出席だけ取って退出する者もいる。そういうケースは少なくない。なぜそのような学生が多いのかという点、教員が面白い授業をしない。大学で学んだことが社会や企業で評価されるという認識が学生にはない。就職活動しているが、成績表を提出させない企業は少ない。GPAについて触れる企業もなかった。大学で学んできたことは役に立たないという社会人も多い。一方で企業が共同で行うプログラムについては、興味を持つ企業が多かった。大学で学んだことが社会で評価される仕組みが確立されれば、もっと授業に真剣に取り組むようになると思う。

## 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

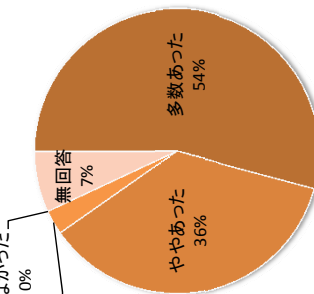
※回収率=約37%(72人/197人)

フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためにならなかった」「参考にならなかったものはありましたか」

本日参加された満足度をお聞かせください



満足度: 77%



参考となるコメント: 90%

# 第11回大学教育改革地域フォーラムの結果

【名称】大学教育改革地域フォーラム2012 in 三重大学  
 【日時】平成24年7月21日(土) 13:00～17:00  
 【テーマ】いま、変える大学の学び  
 【形式】熟議

サブテーマ: ①教育方法・授業内容の改善、  
 ②学修支援の改善、  
 ③教員の教育力の向上、  
 ④実質的な学修時間の確保、  
 ⑤大学入試の改善  
 (進行) 宮崎牙子氏 (三重大学学生総合支援センター特任教授)

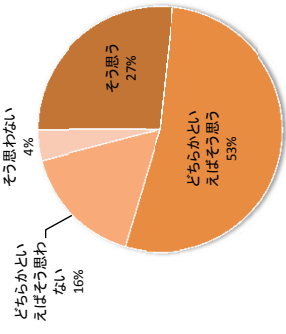
【参加者】66名(学生:24名、大学関係者(教職員):21名、その他:21名)

【熟議の結果】  
 (→ 別紙「大学教育改革地域フォーラム2012 in 三重大学～いま、変える大学の学び～ 熟議のまとめ」を参照)

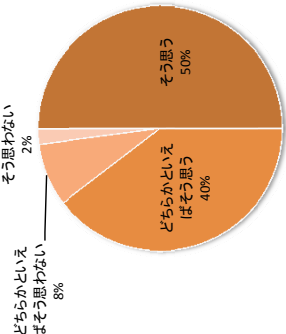
## 【学生及び教職員を対象とした主なクリッカー※アンケート結果】

※クリッカー:大教室等でアンケートへの学生の回答を即時に集計・表示できる無線端末(学生・教職員各約50人)

大学生の学修時間は不足している【学生】

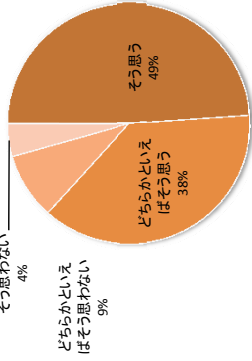
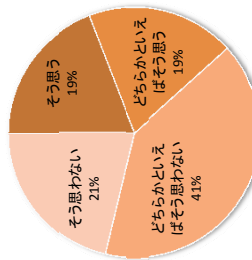


大学生の学修時間は不足している【教職員】



(本問については、学生、教職員ともに多くが肯定的)

(今日の映像を基で) 課題やレポートが増えても、教室外での学修時間は増やさなければならないと思う【学生】



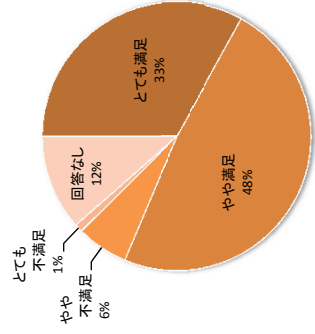
(本問については、否定的な学生が多いが、教職員は多くが肯定的)

## 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

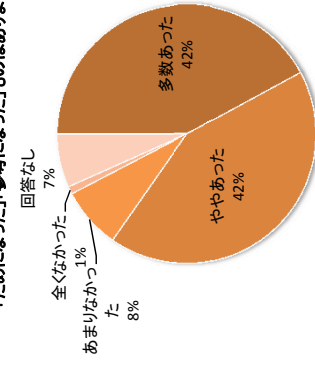
※※回収率=約65%(209人/322人)

フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためになった」「参考になった」ものはありましたか

本日参加された満足度をお聞かせください



満足度:82%



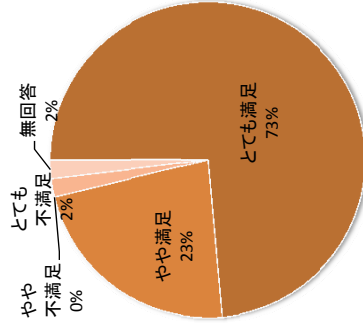
参考となるコメント:84%

## 【学生を含めた参加者を対象とした主なアンケート結果※】

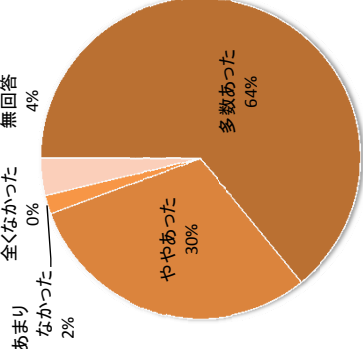
※※回収率=約80%(53人/66人)

フォーラム参加者の発言・コメントの中に「ためになった」「参考になった」ものはありましたか

本日参加された満足度をお聞かせください



満足度:96%



参考となるコメント:94%

## 大学教育改革地域フォーラム2012 in 三重大学～いま、聚える 大学の学び～

### 熟議のまとめ

#### 三重大学 大学教育改革地域フォーラム実行委員会

#### はじめに

近年、若者の精神的・社会的自立の遅れや社会人基礎力の欠如、合わせて約300万人の早期離職者やフリーター、ニートの増加と長期化等が社会問題となっている。これまでの若年労働者の人材育成は企業内教育に依拠するところが大きかったが、科学技術・国際化・情報化の進展、産業・社会構造の急激な変化で状況が大きく変化した。大学教育改革への期待が高まっている。この「熟議のまとめ」は、中央教育審議会大学分科会大学教育部会（審議まとめ）「予測困難な時代における生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（2012年3月26日）を受けて、本学共通教育『キャリア形成・能力開発』の受講生が教職員・行政・企業・市民の方と実行委員会を構成し、熟議形式で実施した「大学教育改革地域フォーラム2012 in 三重大学～いま、聚える 大学の学び～」（2012年7月21日）における結果を基にまとめたものである。熟議では60名（学生・院生21名、大学教職員17名、企業12名、行政6名、学校教員3名、市民1名）が10班に分かれて、「①教育方法・授業内容の改善、②教員の教育力の向上、③学修支援の改善、④実質的な学修時間の確保、⑤大学入試の改善」の5つのサブテーマにてKJ法で意見を出しあい、班ごとにまとめて発表した。PC入力記録の分量は①の分野が70%、②が20%、③④⑤を合わせて10%の割合であった。

#### 1. 教育方法・授業内容の改善

##### 提言1：「能動的に、主体的に学ぶ授業」へと再編成する。

文部科学省は「確かな学力とは、知識や技能とともに思考力、判断力、問題解決能力、学ぶ意欲も含めた実践生活に役立つ総合的な学力」と定義している。熟議では「一斉授業を減らし、参加型の実践的な授業がほしい」「一方通行の座学で学修意欲をかき立てる内容になっていない」等の声が寄せられた。とくに共通教育は単位数が多く、学生は「単位のために」、教員側は「とりあえず出席してテストを受ければ」という意識になりがちである。また、学生の授業中の姿勢が受動的で、改革する意欲がなくなるとも進級してしまいうので、学びに対する危機感が不足している。しかし、大方の学生は能動的・主体的な学修をしたいと考えている。ここでの課題は「学生の自己肯定感やモチベーションを高める教育方法」「主体的に考える力をはぐくむ授業内容」「学んだ内容の見える化」「実践力が身に付き、学ぶ目的や楽しさがわかる授業」等で、目指す方向は「受動的学習から能動的学習へ」「一方通行から双方方向へ」「社会で活きるイノベーション授業へ」と転換する仕組みづくりである。具体策は、学生自ら問題提起して意見を伝えるブレインディング等、多様な体験により「社会人しながら企画立案・運営するイベント、ロールプレイング等、多様な体験により「社会人力」を育成する機会を意図的に増やすために共通教育のカリキュラム再編成を提言する。

##### 提言2：キャリア教育（＝生き方教育）を必修化する。

大学・学部選びは成績・偏差値重視の進路指導による場合が多いので、入学後に「これでよかったのか」と進む方向を見失う学生も存在する。このことから、入学時の履修ガイドダンスは教員や上級生を動員して動機づけを丁寧に行う必要がある。また、学部によっては共通教育の必修科目が多くて単位取得に精一杯で、「学問の本質的な意義」「将来の生き方」「学修内容をどのように取り込み、体系化し、活用するか」等を考える機会がなく、「社会における役割や働くことの意味」を十分に認識せずに卒業してしまう。そこで、早急に「主体的に学び、将来の生き方を考え、進路決定できるように、[人間力]を蓄えるための授業」を準備し、入学直後に「受け身から主体者へ」と発想転換することが重要である。関連して「もの見方・考え方」「社会的・経済的自立」「基本的生活習慣、倫理観、生命観、道德観」「分業により社会が形成されていること」「自分や他者の命を大切にすること」等も欠くことのできない事項なので、初年次教育におけるキャリア教育の必修化を提言する。インターンシップについては、従来は3、4年生がおもな対象者であったが、期間を長期化し、低学年も積極的にインターンシップに参加することを推奨すべきである。また、学生を指導する教員の企業インターンシップの実施を提言する。さらに、大学入学後に、学生が「ほんとうにやりたいこと」を見つけたら、入学後に自分の向き不向きを見極めて路線変更を希望する場合における望ましい編入ルールの整備について提言する。

##### 提言3：少人数授業の拡充と、TA・SA制度を整備する。

学生自らが問題発見・問題解決する授業として、PBLセミナー（Problem Based Learning＝問題解決型授業）のような少人数授業の拡充を提言する。チュートリアルでは履修した授業内容を復習し、発展させてディスカッションやプレゼンテーションする等、学んだことをすぐ試せる環境を整備し、アウトプット力や応用的思考力等の能力開発をする。また、その授業に関するTA（ティーチングアシスタント）、SA（スチューデントアシスタント）等を増員し、先輩が後輩の授業を支援する仕組みづくりを提言する。これは「大学が学びの場であると同時に働く場」としての機能を持つことになる。そして、少人数授業の拡充で懸念される教員確保には、実務者による契約教員の採用を推進することを提言する。

##### 提言4：シームレス化・連携の強化で学びを深める。

学内では初年次キャリア教育にて「自己分析（自分探し）」「自分みがき」を学ぶが、共通教育と専門教育を系統的・有機的に連結し、シームレス化すると学びがさらに深まる。ゆえに、上級生になっても共通教育を履修し、一部は卒業単位（専門科目・選択）に認定する仕組みを提言する。学生は「もっと他学部の授業を受けやすくして欲しい、学びとは1つの学科レベルに制限できるものではない」と望んでいる。大学内のシームレス化の事例は、全学の学生・教職員によるディスカッション、役割分担して運営するイベントの開催等が有効で、成果として学生の学びが深まり、総合力が身につく。

また、大学と地域社会とのシームレス化・連携の具体策は、授業に企業人等の講義を組み込んだり、大学のサテライトオフトオプイスや公施設等で学んだ成果を学生が地域の小中高生や高齢者に話す機会をつくる。学生は他の人に説明することで理解が飛躍的に深まり、学ぶことと動機付けにフィードバックできる。小中高生には年齢の近い学生と接する好機となり、勉学の意欲や将来の進路への動機づけとなり、地域活性化の原動力になる。高齢者は文化や知恵を伝えることができる。生涯学習社会では、大学は「文化や学習、教育資源、健康づくり・スポーツ・レクリエーション活動の拠点」としてコミュニティカレッジの機能を持つことが求められている。学生がボランティアやインターンシップ等で参加す

れば学びが深まり、将来の職業選択にも幅が出てくるので、シームレス化・連携の強化を提言する。また、地域社会のアイデンティティ形成を重視した教育の拡充を提言する。例を挙げれば、「三重大学の知的財産」「三重学」「三重学」「三重の企業学」のような講座、学生・教員のアイディアや研究成果を企業化して「学生ベンチャー」「大学ベンチャー」に繋げる講座等は、郷土愛をなくくみ、生き方を考える授業にもなる。いずれも「学習成果の見える化」に繋がり、大学生の目的意識や成長、改革への意欲づくりに繋がる。

#### 提言 5：グローバルな人材育成をめざす授業を拡充する。

「海外で学んだことと日本で学んでいることにギャップがある、留学すると自分ごとまで通用するかわかる」と留学経験者はいう。一方で、海外からの留学生の増員を図ると「内なる国際化」が促進され、多様な価値観に出会う機会が増え、異質なものを対して受容する「思いやり」が醸成される。また、海外勤務経験者やグローバルな視点で活躍されている社会人の入学枠の増員で異年齢・異業種の方との交流が促進され、多くの異なる意見や多角的なものが見方に出会うことができ、学内でもグローバルな人材育成を推進できる。現実には、新しい環境になじめなかつたり、孤立していたりと悩みを抱えている留学生が存在しているので、普段から交流を密にして信頼関係を構築することが大切である。その点も踏まえて、留学生や社会人とともに学ぶ「英語による授業」の拡充を提言する。

## 2. 教員の教育力の向上

#### 提言 6：教員の教育力の向上のための仕組みを創る。

現在、産業・雇用構造が大きく変化しているにもかかわらず、大学教員は大部分が終身雇用のままである。そこで、「大学は誰のものか」「大学の学びとは何か」と原点に立ち戻って考える時、「学びの質の保証」「モチベーションの高い人材の育成」という命題には、教員の教育力の向上が重要な鍵となる。たしかに、教員は日ごろから教育・研究・地域貢献等に邁進しており、「一人前になりたい学生」と「一人前の学生に求めてほしい企業」との仲立ちも期待され、さらに「学生・大学を元氣」にすることも求められている。しかし、学生からの期待は「学ぶ目的や将来像を示して欲しい」「先生も教授法・学習者の理解について学んで欲しい」「先生との距離感を何とかしたい」等である。こうしたニーズに応えるために、ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development) が教育力を高める実践的方法として、また授業改革の組織的な取り組みとして実施されている。熟議では、「教育と研究は両輪、その成果を地位貢献に活かす」「研究重視型と教育重視型の教員の役割分担」「共通教育専任の配置」「新科目開講には研究業績の再審査を」等の意見も出た。ここでの提言は、教員の倫理観や意欲、能力等を保持できるよう、教育力向上のための仕組みを創ることである。また、大学教育に MOT (Management of Technology) の視点を導入し、イノベーションの創出をマネージメントしていくことも時代の要請である。

#### 提言 7：学生の成績評価と、教員の教育業績評価を整備する。

学期末に「学生による授業評価」が実施されているが、教員は必ず授業改善に生かすべきである。「共通教育は専門課程の教員、専門課程は外部評価者が評価」「卒業研究の審査に社会人も」「教育業績評価も整備すべき」「教員の職務役割を明確にし、教育・研究の比率を決める」「学生の質の変化に対応できるように新たな教授法に優れている教員が欲しい」等、さまざまな意見が出た。ここでは教員の教育業績を客観的に測定する方法の整備を提言する。

一方、学生の成績評価に意欲、貢献度やチャレンジ姿勢等も項目に入れて、自ら考えて解決したこと、失敗の改善等も評価する仕組みづくりを提言する。評価事例は「行事やボランティア活動の企画運営。地域・街おこし活動、障がい者のサポート」等である。

## 3. 学修支援の改善

#### 提言 8：主体的な学びのための学修環境を整備する。

学生は、学修して得た知識・情報を活用し、経験を積み重ねてキャリア形成していくので、「図書館の24時間開館の実現」「自習できる場所、多様な学習形態が可能な場所の充実」「学んだことを実践できるトレーニングの場所や教員の工夫」「英会話用に自由に声を出してもよい部屋」等、学生の主体的な学びを支援する環境整備の促進を提言する。

#### 提言 9：奨学金貸与や企業化への支援を図る。

学生はアイディアや意欲があっても資金が充分でない場合が多い。審査の上、企業化への支援を提言する。また、学費捻出の必要性からアルバイトををする時間が増え、学びの時間を削る学生もいる。今後は民間企業等と協力して奨学金や海外研修等の拡充を提言する。

## 4. 大学入試の改善

#### 提言 10：大学入試に面接・口頭試問を導入する。

現状では、成績・偏差値重視で大学を選んでいるため、「入学前後のギャップ、学部学科とのミスマッチ、入学後のモチベーションの低下等」の課題がみられる。高校生は具体的なかつ目的のある志望があつてこそ自主的に大学を選択することができるので、学力判定と同時に「大学で何を学びたいのか」を確認するための面接・口頭試問の導入を提言する。熟議では、「センター試験を課さない入試枠の拡大」「センター試験不要」「センター試験のみで判定」等の意見が出たが、いずれも再検討が前提である。そして、高校における進路指導のあり方を見直して、高校のキャリア教育科目において「なぜ学ぶのか」「いかに生きるか」を真剣に教える機会を設ける必要がある。大学側も、「入学したら、本学で学べるメニュー」の紹介がはつきりしていただければ、その環境を提供する大学を探し、結果として「意欲的な高校生と企業の双方から選ばれられる大学」になる。そのことが高いモチベーションを保持しながら授業に参加する学生が増え、「主体的な学生の育成」「元氣な大学づくり」に繋がる。

## 5. 実質的な学修時間の確保

大学教育では授業の事前準備や事後の展開に要する時間を含めた学修時間を十分に確保することが重要で、学生にとつても時間の使い方は大きな関心事である。生涯学習社会では、「生涯学習とは、家庭・学校・社会教育を統合した学習」と定義されている。つまり、机に向う時間ばかりでなく、「いつでも・どこでも・たれでも」が日常生活の中で学ぶ時間も含む。具体的には、授業と授業前後の予習・復習、クラブ活動やボランティア、インターンシップ、アルバイト等、すべての体験や学びの時間を確保して、学生自身が「実質的な学修へ」と転換していくことが重要である。